

J A 御中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：JA 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)
(公印省略)

営農情報 1 8

暖冬に伴う麦類の栽培管理技術対策

今年の麦は、11 月が少雨に経過したことから順調に播種され、出芽も平年並み～4 日程度早かった。また、11 月下旬～1 月上旬が高温（平年差：+1.9℃）に経過したため、麦の生育は旺盛で、7～10 日程度早くなっている。

向こう 1 か月の季節予報（福岡管区气象台発表、1 月 11 日～2 月 10 日の天候見通し）では、平年に比べて気温が高く、平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いと予想されている。そこで、麦の収量安定のため、下記のような技術対策を実施する。

技術対策

(1) 排水対策

ほ場の湿潤状態が続いており、排水対策が重要である。ほ場に水が溜まらないよう排水溝の溝さらえを行い、排水口を整備して地表水を排水する。ほ場が乾燥した時点で、土入れを兼ねて作溝する。

(2) 土入れ・踏圧

土壤が乾燥した時点で、速やかに土入れ・踏圧を実施する。

踏圧は、倒伏防止、早期茎立ち抑制のため、節間伸長開始期前（踏圧の晩

限：草丈 20～25cm 程度）までに 3～4 回実施する。生育が特に旺盛なほ場では、更に 1～2 回多く実施する。

土入れは、倒伏防止や雑草防除の効果が高いため、3 月上旬までに 2～3 回実施する。

(3) 雑草防除

雑草の発生量が多い。雑草の草種や発生状況を観察し、選択制茎葉処理除草剤を適期に処理する。除草剤は普通作雑草防除の手引きを参照し、最新の登録情報を確認して使用する。

(4) 追肥

1 回目の追肥（分けつ肥）は、過剰分けつによる倒伏、肥料切れによる後期凋落を避けるため、早期施用は行わない。小麦・食料用大麦・裸麦では 1 月下旬に基準量を施用し、ビール大麦は 1 月下旬～2 月中旬に基準量を施用する。追肥に緩効性肥料を用いる場合も 1 月下旬に施用するが、施肥後に土入れを実施して確実に覆土を行う。

2 回目の追肥（穂肥）は、食料用大麦・裸麦では 2 月下旬、小麦では 3 月上旬に基準量を施用する。なお、葉色が低下した場合は、2 回目の追肥を早める。

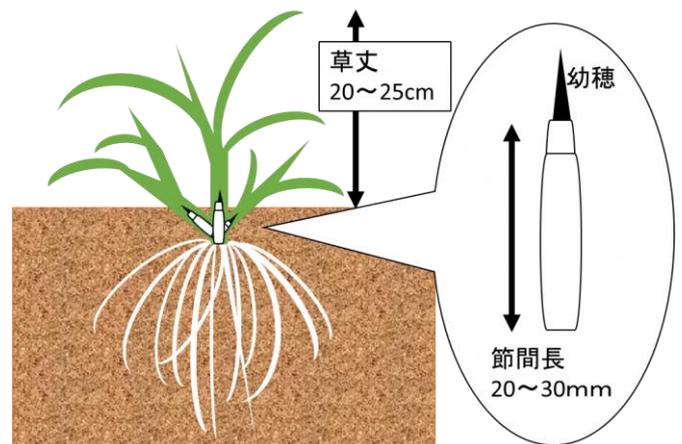


図 茎立ち期（節間伸長開始期）の目安

以上